

2015 - DTM 講座「コード進行について」

◎はじめる前に

当講座では**コード**について学びますが、この理論は楽曲制作を行う上で必ずしも理解をしなければいけない訳ではありません。

ただ、知識として持っておくと作曲時に非常に便利なので覚えておいて損はないと思います。なのであまり難しく考え過ぎずにやっていきましょう

※当講座では「ドレミファソ...」を、アメリカ表記の「CDEFG...」として表記したり、しなかったりします。

●おさらい

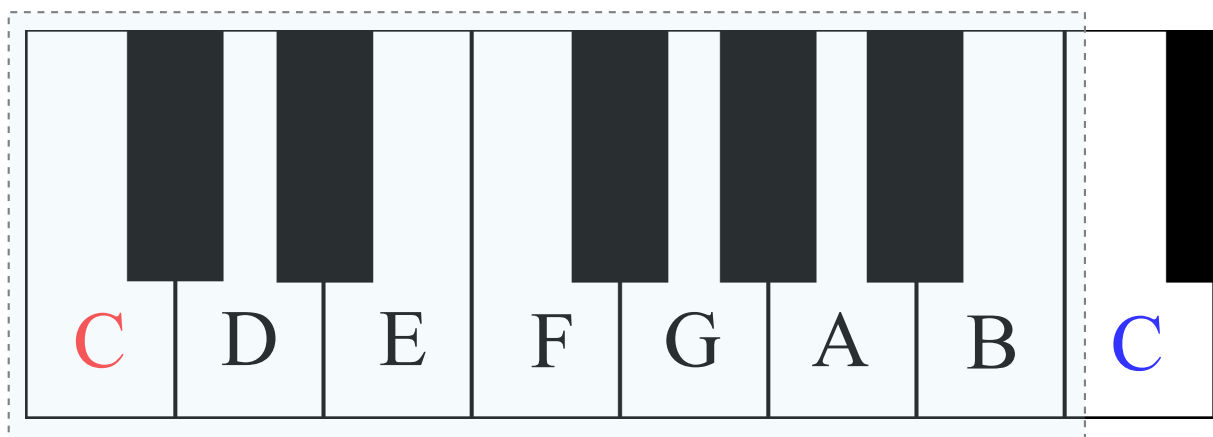


図 1. 鍵盤上の音とオクターブについて

音は、1 オクターブ上で白鍵・黒鍵を含めて全部で **12 音**あります。

ちなみに左側の**C**を基準に、更に 12 音上に数えていくと右側の**C**に辿り着きます。

この感覚が『**オクターブ**』ですね。

ちなみに、12 音上下しても『**オクターブ**』が違うだけで音自体は全て同じです。

この **12 音**の中から **7 音**選び、曲調を決める作業をします。

曲調は大きく分けて、**明るい曲調(長調)**と**暗い曲調(短調)**の 2 つに分かれます。

このどちらの曲調も、基準となる音から決まった規則に従い **7 音**まで使う音を絞ることが出来ます。

この絞った音で出来た音階の事を『**スケール**』と呼びます。

『**スケール**』については、曲調に合わせた様々なモノが沢山存在するので、興味がある人はスケールと和音についての講座資料や、ネットで各自調べるなどしてみたりして下さい。

●コード進行について

1. はじめに

■コード進行とは？

前回習ったであろう“和音”を順番に並べて演奏することで曲が出来ます。

この時に出来る“和音”の順番の事を**コード進行**と呼びます。

前回の講座の最後のほうで、ダイアトニックコードという物を学んだと思います。

ダイアトニックコードはスケールの音を「3和音(トライアド)」に変えたり、「4和音(テトラッド)」に変えたものの事を言います。

下の図はトライアドで構成されたCメジャー・スケール上に成り立つダイアトニックコードの図です。

簡単に言えばCメジャースケールに合わせて和音を並べているだけという事になります。

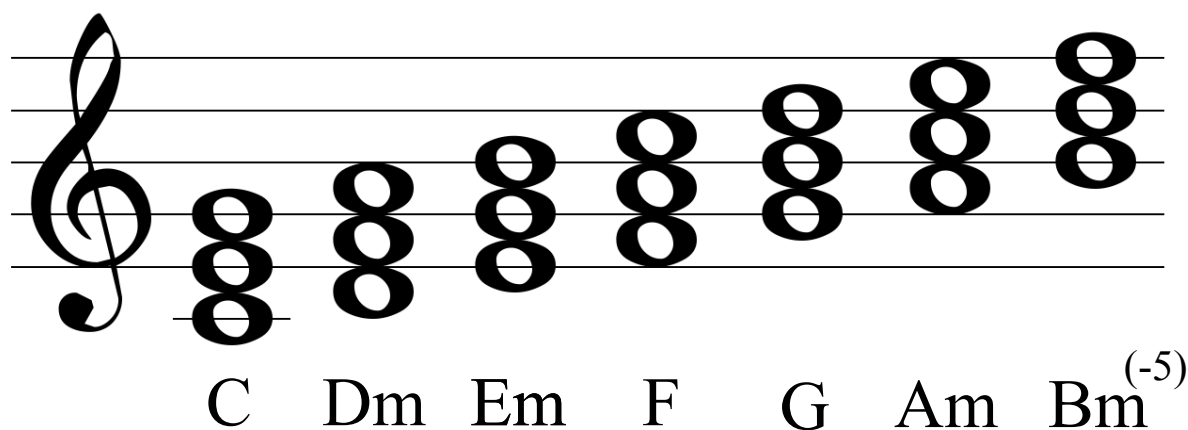


図 2.Cメジャー・スケールのダイアトニックコード (トライアド) の譜面

当講座ではこのダイアトニックコードを元に話を進めていきたいと思えます。

2. ディグリーネームについて

前講で学んだ「ダイアトニックコード」にて、一つ一つのコードを「C・Dm・Em...」という風に記述していましたね。この英文字自体は「**コードネーム**」と呼ばれています。

このコードネームを、どの調を使っても話が通じるように表記の一般化をさせていただきます。

“どの調も”という事なので、Cメジャー・スケールの場合は以下の様に表すことができます。

The diagram illustrates the transformation of diatonic chord names in the C major scale. It consists of two musical staves. The top staff shows seven triads on a treble clef staff, with their letter-based names written below: C, Dm, Em, F, G, Am, Bm⁽⁻⁵⁾. A large grey arrow points downwards from the F chord to the bottom staff. The bottom staff shows the same seven triads, but with their Roman numeral names written below: I, II^m, III^m, IV, V, VI^m, VII^m⁽⁻⁵⁾. The Roman numerals are color-coded: I, IV, and V are blue; II^m, III^m, VI^m, and VII^m are blue with a superscript 'm'; and the (-5) superscript is red.

図 3.Cメジャー・スケールのダイアトニックコード譜面のディグリーネーム化

「**C**」という文字がローマ数字の「**I**」に変わり、マイナーコードには変わらず「**m**」がついています。つまり、トライアドの下に書いてある文字が**コードネーム**から**ローマ数字**に変わりましたね。

この表記のことを新しく「**度数表記**」または「**ディグリーネーム**」と呼びます。

この時、メジャースケールのアルファベットが変わったとしても、ディグリーネームが変わる事はありません。

ディグリーネームを使う利点というのは、簡単にいえば後ほど行うコード進行表記が見やすくなるからです。

さらに短調の場合

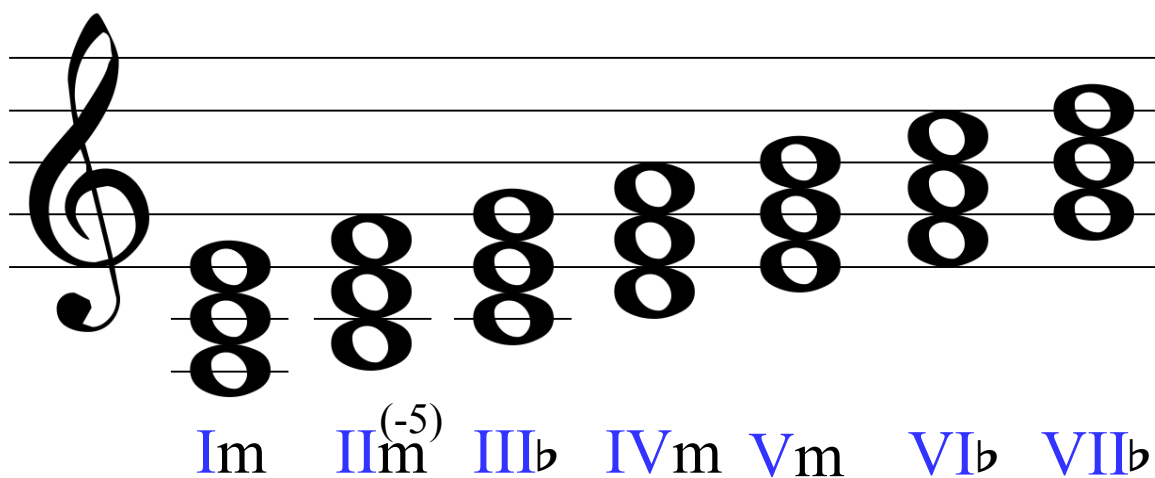


図 4.A マイナー・スケールのダイアトニックコード譜面のディグリーネーム

こんな感じに表記することが出来ます。

しかしまだ上記の 2 つのディグリーネーム、**不思議な記号**があったり、**m** が沢山あったりと“ゴチャゴチャ”していますよね。

ここで更に“ゴチャゴチャ”している物を消して見やすくしてしまいましょう。

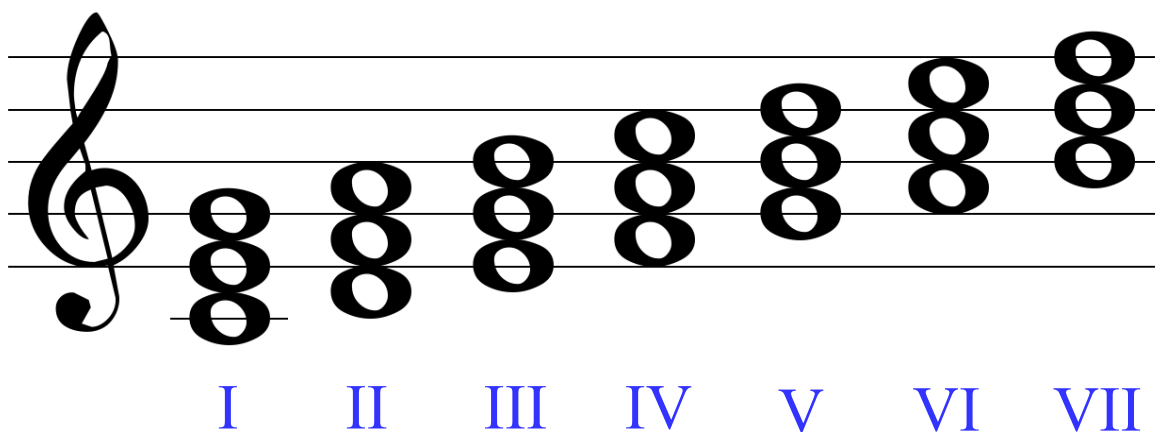


図 5.簡略化した C メジャー・スケールのダイアトニックコード譜面のディグリーネーム

A マイナー・スケールの場合では以下の様になります。

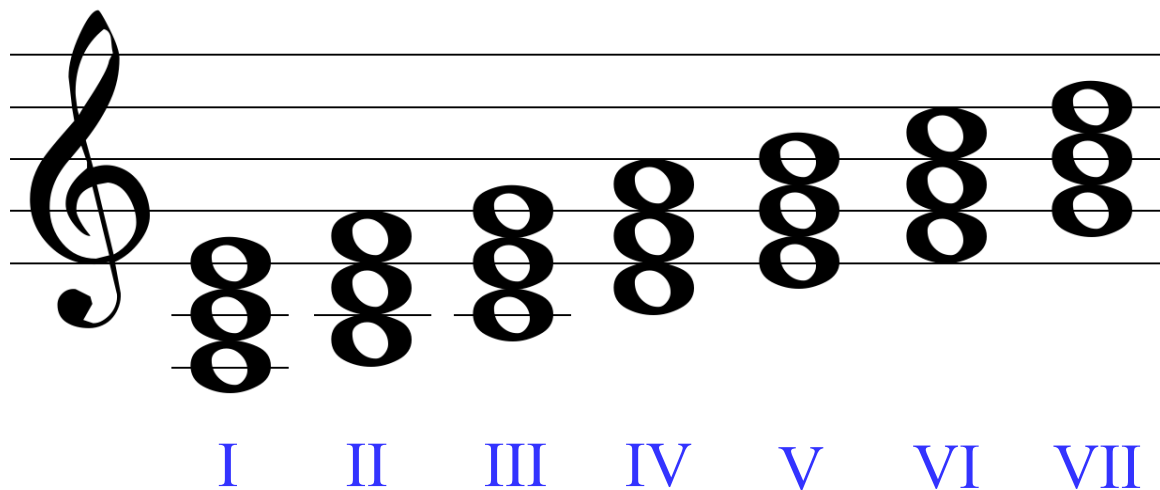


図 6.簡略化した A マイナー・スケールのダイアトニックコード譜面のディグリーネーム

ついに数字だけになってしまい、Cメジャーの場合でも A マイナーの場合でも殆ど見分けのつかない表記になりましたね。

この様に、ディグリーネームを使うことで、前述したとおりに

『どの調を使っても話が通じるように表記の一般化』をすることが可能となり、また数字のみにすることで、m や b など余計な記号に気を取られずに表記することも可能となりました。

今後はこの数字のみの**簡略化**したディグリーネームを使って説明を行っていきます。


と言っても、ただ余分なものを消去して簡略化したように見えているだけなので、理由などは深く考えないようにしましょう。

3. ファンクションについて

ファンクションとは「機能」という意味がありますが、ここではもっと噛み砕いて「音の性格やクセ」とでも考えておきます。

つまりコード進行の中には、**不安定な響きをする音**だったり**安定した響きをする**「性格やクセ」のある音が沢山組み合わせられて一つのコード進行として成り立っています。

「性格やクセ」のあるコードを簡単に説明すると以下の三種類に分けることが出来ます。

- 
- **トニック(T)** - ディグリーネームの **I, III, VI** に対応
三種類のコードの中でも一番安定感が強く、コード進行の始めや終わりで使うことにより安定した進行を作ることが出来ます。
なおこのトニックは、後に説明する**サブドミナント(S)**や**ドミナント(D)**を含め、TSDのどこにでも向かうことが出来る性質を持っています。
 - **サブドミナント(S)** - ディグリーネームの **IV, II** に対応
トニック(T)よりも少しだけ不安定な響きをしているコードです。
このコードは**トニック(T)**に戻ろうとする性質を持ち、また**ドミナント(D)**へ向かおうとする不思議な性質を持っています。
 - **ドミナント(D)** - ディグリーネームの **V, III** に対応
三種類のコードの中でも一番不安定なコードです。
主に**トニック(T)**や**サブドミナント(S)**の後に使われ、性質的には**トニック(T)**のみに戻ろうとする性質を持っています。

上記をまとめると以下ようになります。

◆ TSDの動き方について

1. **T→D→T** (トニックから始まりドミナントへ向かった後、トニックへ戻る)
2. **T→S→T** (トニックから始まりサブドミナントへ向かい、トニックへ落ち着く)
3. **T→S→D→T** (上記 1,2 の組み合わせで、最終的にドミナントからトニックへ戻る)

◆TSDに対応するコードについて

	安定	少し不安定	不安定
TSD	トニック	サブドミナント	ドミナント
対応コード	I, III, VI	IV, II	V, III

表 1.TSDとコードの対応表

■コード進行 - 例

上記のTSDを使用した有名なコード進行をいくつか挙げてみます。

●王道進行 - ポップスなど、主に現代の音楽でよく使われている進行

IV - V - III - VI

・Cメジャーのコードネームで書くとこうなります。

F - G - Em - Am

・これをTSDで表してみます。

S - D - T - T

不思議なことにサブドミナント(S)という少々不安定なコードから始まっています。しかしその後ドミナント(D) → トニック(T)という風に不安定な状態から安定な状態へと向かっていきます。

●カノン進行 - 「パッヘルベルのカノン」をはじめ、世界中で使われている進行

I - V - VI - III - IV - I - IV - V

・Cメジャーのコードネームで書くとこうなります。

C - G - Am - Em - F - C - F - G

・これをTSDで表してみます。

T - D - T - T - S - T - S - D

TSDの組み合わせを見ていくと、T-D-Tで始まり、T-S-Tと繋がり、S-Dで終わるかとおもいきや最初のTに無事に戻ってくるという、なんとも基本的な性質を上手に活かした組み合わせで作られている進行です。

- 小室進行 - 小室哲哉氏が多用した進行で、主にサビで使用すると盛り上がる

VI - IV - V - I

・Cメジャーのコードネームで書くとこうなります。

Am - F - G - C

・これをTSDで表してみます。

T - S - D - T

王道進行と同じく、TSDの基本的な性質が活かされた構成になってます。
コードネームで見ると、暗い音であるAmから徐々に明るい音(F | G | C)
へと上がっていくため、曲全体に明るさと感動を見いだせる進行です。

以上の様に、コード進行はTSDの規則性を守られて作られています。

徐々に慣れてきたら自分でコード進行を作ってみる、というのも面白いかもしれません。